

富士山噴火の痕跡を巡る(その8)

—断層運動によって押し上げられた富士川・潤井川沿いの溶岩流—

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 小林 淳〉

このコラムで私は、富士山の山麓遠くまで流れ下った溶岩流をこれまで2回紹介してきた。一つは相模川を流れ下った「猿橋溶岩流」(その5で言及)、もう一つは黄瀬川を流れ下った「三島溶岩流」(その7)である。これらの溶岩流は、ともに新富士火山の形成初期(富士宮期:17,000~8,000年前)に噴出した。この時期の富士山は、粘性の小さな溶岩を頻繁かつ多量に噴出している。富士山の北西~南斜面においても、同時期には大量の溶岩流が流れ下り、その一部は現在の駿河湾底、水深100m付近でも確認されている。今回のコラムでは、同じ富士宮期に北西~南西斜面で噴出し、地域の活発な地殻変動の影響を受けて複雑な経路をたどり、最終的に富士川に流れ込んだ溶岩流を紹介する(図1)。

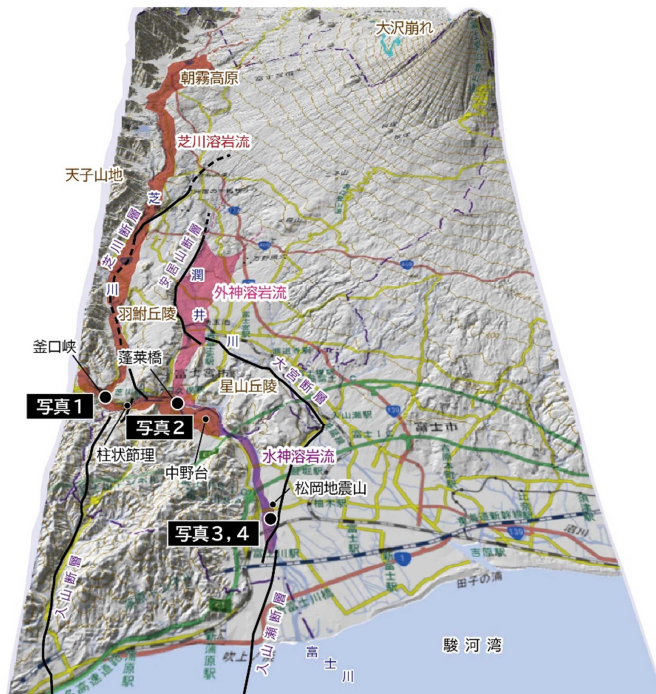


図1 断層運動によって作られた地形とそれに影響された溶岩流分布(背景図は全国Q地図をもとに作成)

まず、最も西側で芝川沿いを流れ下った「芝川溶岩流」は、現在の朝霧高原よりやや高い地点で噴出し、天子山地の東山脚沿いを南下した。続いて発生した溶岩流もこれを追うように流れ下った。このうち芝川溶岩流が最も遠くまで達しており、芝川と富士川の合流点からさらに溢れ出し、当時の富士川を約5km以上にわたって埋め立てながら流れ続けた。その痕跡は、合流点の「釜口峡」(写真1)や、静岡県指定天然記念物「富士山芝川溶岩の柱状節理」から蓬萊橋(写真2)まで続く溶岩の絶壁、そして多くの人が住む高台「中野台」などで独特の景観を見ることができる。

また、富士山西斜面の大沢崩れを源流とする潤井川は、羽鮒・星山丘陵沿いに水域を集め、現在は田子の浦で駿河湾に注いでいる。しかし溶岩分布を見ると、少なくとも一万年前までは現在とは全く異なる流れであったことが分かる。約1万年前に南西斜面を流下した「外神溶岩流」が、現在の潤井川や星山丘陵を横切って富士川に流れ込んでいるからだ。蓬萊橋では、芝川を伝ってきた芝川溶岩流を壁にして、そこに星山丘陵を乗り越えてきた外神溶岩流が流れ込む様子が観察できる(写真2)。「星山丘陵を横切って……」と述べたが、厳密には溶岩流が地形の高まりを乗り越えたわけではない。かつて一様な下り斜面を流れていた外神溶岩流が、その後の断層活動による星山丘陵の段階的な隆起によって、現在は丘陵を乗り越えて流れているかのように見えているのである。





写真1 芝川・富士川合流点の釜口峡を構成する芝川溶岩流(空撮画像は小山真人撮影)



写真2 富士川(蓬萊橋付近)に流れ込む複数の溶岩流(空撮画像は小山真人撮影)

このように断層運動で新たな高まりが生じ、溶岩流が分断されると、その当初の姿を把握するのは容易ではない。富士川をさらに下った富士市松岡の河床や河岸にも、富士宮期最初期の溶岩流(水神溶岩流)が露出している(写真3)。この溶岩流の直下では、当時の河原の砂に埋もれていた木片が溶岩に覆われ、蒸し焼きにされて「炭」となった状態を観察できる(写真4)。放射性炭素年代測定(^{14}C 法)によれば、この木片が焼かれた年代は約17,000年前を示し、芝川周辺を流れ下った溶岩流の年代と一致する。この溶岩流は、南海トラフへと続く長大活断層帯の一部に沿って分布しており、「松岡地震山」とともに安政東海地震の痕跡が疑われる地点としても知られている。かつてこの溶岩流は、富士山南麓を駿河湾へ向かって広がったものが、繰り返される断層運動によって地表に露出したものと考えられていた。しかし、富士山南麓に広く分布する溶岩流の年代は、富士市松岡での年代よりも明らかに新しい。そのため『富士火山地質図(第2版)』では、水神溶岩流は(富士山麓から直接から広がったのではなく)富士川を流れ下ってきたものとして図示されている。

富士山の溶岩流が噴火当時の地形を反映するのは自明だが、現在目にする分布は、噴火後も続く断層運動、すなわち富士山が載る大地そのものの動きをも反映している。それは、現在まで続く富士山の激しい活動の証拠そのものと言えるのである。



写真3 富士川河床と河岸に露岩する水神溶岩流(空撮画像は小山真人撮影)



写真4 溶岩流に覆われ蒸し焼きにされた「炭」(←印)